

介護基礎実習における学生の実習姿勢と実習指導体制との関連性

Relativity of a Student's Training Practice Attitude and
Laboratory Work Organization in Care Basic Training

丸山 順子 尾台 安子 合津 千香 小坂 みづほ
Junko MARUYAMA Yasuko ODAI Chika GOZU Mizuho KOSAKA

要旨

介護福祉士養成教育において、介護の専門知識・技術・態度を統合し学ぶ介護実習には、初期の実習から学生自身の動機づけや精神的な支援に加え、実習指導体制を整えることは重要である。

今回、初期の介護実習に焦点をあて、学生の実習姿勢と実習指導体制との関連性について調査し、検討した。学生の実習姿勢に関する自己評価は、高かった。積極的な実習姿勢ができたからこそ、利用者、職員に受け入れられて、多くの学びを得て充実感があつた。実習に対する姿勢が消極的な学生は、実習のしにくさを強く感じており、実習に臨む姿勢が実習の学びや充実感に影響を与えていた。実習しやすさ、しにくさの要因を2003年度と比較したところ、実習しやすさの要因は増加していた。また、実習しにくい要因は減少していた。学生が実習しやすい実習指導体制は整ってきていた。

【キーワード】 介護実習 実習姿勢 実習指導体制 実習しやすさ 実習しにくさ

はじめに

介護福祉士養成課程において介護実習は、2年間で450時間行われる。これは、養成課程における1800時間のうちにあてる時間数で、うちの4分の1に相当する。2009年度より新カリキュラムとなった現在においても、実習時間数は変わらない。また、介護実習は、カリキュラムを構成する「人間と社会」「介護」「こころとからだのしくみ」の3領域を関連づけ、介護に必要な専門知識と技術、態度を統合的に学習するものである。

しかしながら、学生にとって介護実習は、精神的に不安が大きく、健康上においても負担が出てくるものである^{1)~3)}。介護実習については先行研究も数多くあるが、実習初期において実習体制と関連付けている研究は少ない。しかし、本学科において2003年に介護実習における学生の意識や実習体制について調査研究を行っている⁴⁾。現在その調査研究から8年が経過しているが、実習指導者に対し、実習巡回や実習指導者連絡会等で教育内容や学生の状況などの理解や協力体制を促してきた。また、カリキュラムの変更に伴い、介護実習の強化が図られた^{注1)}。介護過程を展開する介護実習Ⅱにおいては、実習施設の指導者に対して実習指導者講習会を修了することが義務付けられ、実習指導マニュアルの作成、施設内研修の充実が求められている。こうした経緯の中で、基礎実習として初めて介護老人福祉施設、介護老人保健施設に6日間の実習を修了した学生に対してアンケート調査を行った。1年次において初めての施設実習であり、新鮮な気持ちと緊張感、

不安感をもった実習になっている。そこで、学生の実習姿勢がどのように実習に影響するか、実習指導体制との関連性はどうかということ明らかにしてみた。本学科の2003年の研究との比較検討もでき、追研究を行うことでさらなる課題を得たので報告する。

1. 研究目的

1年次に初めて介護老人福祉施設・介護老人保健施設の施設実習を行う介護基礎実習において、学生の実習姿勢の実態とその実習姿勢に関連する実習しやすさ・しにくさの要因を明らかにする。また、実習に臨む実習指導体制の関連性を考察し、今後の実習指導体制の課題を見出す。

2. 本学科の介護実習

国で定めたカリキュラムの介護実習としての450時間は、多くの介護現場を見学実習する介護実習Ⅰと介護過程を行う介護実習Ⅱに分かれている。

本学科では、450時間を単位計算の都合上、1年次135時間3単位で18日間行い、2年次に315時間7単位で40日間行っている。1年次では、介護実習Ⅰとして介護導入実習Ⅰ・Ⅱで、12日間で4箇所の施設での見学実習をおこなっている。その対象となっている施設は、宅老所、通所介護事業所、通所リハビリ事業所、認知症対応型共同生活介護(グループホーム)、訪問介護事業所、障害者支援施設等である。また、介護基礎実習として、6日間、介護老人福祉施設、介護老人保健施設で行っている(表1)。介護基礎実習の目的・目標は下記の通りである。

2年次は、介護実習Ⅱとして介護過程の展開を行う実習を組んでいる。個別援助技術実習（17日間）と介護総合実習（23日間）である。対象施設は、介護老人福祉施設、介護老人保健施設で行っている。尚、介護実習Ⅰの介護基礎実習と介護実習Ⅱの実習施設は、同じ施設を登録しているために、介護実習Ⅰであるが、実習指導者が実習指導者講習会を修了

している施設でもある。また、学科開設以来の実習施設として、養成教育に携わっている施設が約8割を占めている。そして、実習指導者とは、年2回の実習指導者会議や実習巡回の折に本校の実習目標や教育の理解と学生の実態の情報交換を行い、介護実習教育において連携を図っている。

表1 実習の構成と単位

	単位数	規定時間数	実習名	期間	実習施設	
介護実習Ⅰ	1	45	介護導入実習Ⅰ	[1年次] 6月下旬頃 (3日間×2)	在宅 関連 連 事 業 所	デイケアセンター またはデイサービスセンター
	1	45	介護導入実習Ⅱ	2月頃 (3日間×2)		宅 幼 老 所 または障害者関連施設
	1	45	介護基礎実習	10月上旬頃 (3日間×2)		訪問介護事業所 グループホーム
介護実習Ⅱ	3	135	個別援助技術実習	[2年次] 5月下旬～ 6月中旬頃 (17日間以上)	介護老人福祉施設 介護老人保健施設	
	4	180	介護総合実習	11月下旬～ 12月中旬頃 (23日)	介護老人福祉施設 介護老人保健施設	

介護基礎実習の実習目的

- (1) 高齢者及び障害者の施設介護の概要について理解する。
- (2) 生活支援技術の活用をとおして利用者への生活支援の意味を考える。
- (3) 利用者の生活環境や個性を理解し、より良い生活を考える。

実習目標

- 1) 施設の介護方針及び施設環境、生活状況を把握できる。
- 2) 指導のもと、安全で個別的な介護実践ができる。
- 3) 利用者との信頼関係を築くことができる。
- 4) 利用者の生活環境や生活習慣などに気づくことができる。

3. 研究方法

1) 調査対象

本短大介護福祉学科介護基礎実習を終了した介護福祉学科1年生 63名を対象とする。

2) 調査期間

平成23年10月11日～10月21日、質問紙締め切りとして実習終了後約2週間。

3) 調査方法と質問内容

質問調査紙にて記述し、所定の場所に学生が提出した。質問項目として、実習における自己評価「取り組み」「あいさつ」「利用者とのコミュニケーション」「職員との関係」「学び」「充実感」の項目に対し、4件法と自由記述を行った。実習体制として「実習しやすさ・しにくさ」について4件法を行い「その理由」について該当する内容について複数回答を行った。

4) 分析方法

集計や図の作成は、Excel 2003を用いた。4件法で得られたデータは、SPSS11.0を使用し、記述統計を行った。自由記述による分析は、その内容をもとにカテゴリー化して整理した。

4. 倫理的配慮

対象者に調査目的、方法、予想される損害と効果、個人情報流出する恐れのないこと等を説明し、協力も任意であることを伝え、同意した学生に行った。

5. 結果

有効回答率は、93.8%であった。対象者の性別は、男性13名(21.7%)、女性47名(78.3%)、年齢は、20歳未満41名(68.3%)、20歳代5名(8.3%)、30歳代8名(13.3%)、40歳以上6名(10.0%)であった。高校生から進学してきた学生は、41名(68.3%)であり、それ以外の社会経験のある学生は、19名(31.7%)であった。国の政策によって、社会人の入学が増え、数年前はほとんど高校卒業の学生だったが、現在では社会人が約3割を占めている(表2)。しかし、介護実習は、初めてであるので、今回の調査では高卒者と社会人の比較検討は行わなかった。

1) 実習姿勢の自己評価

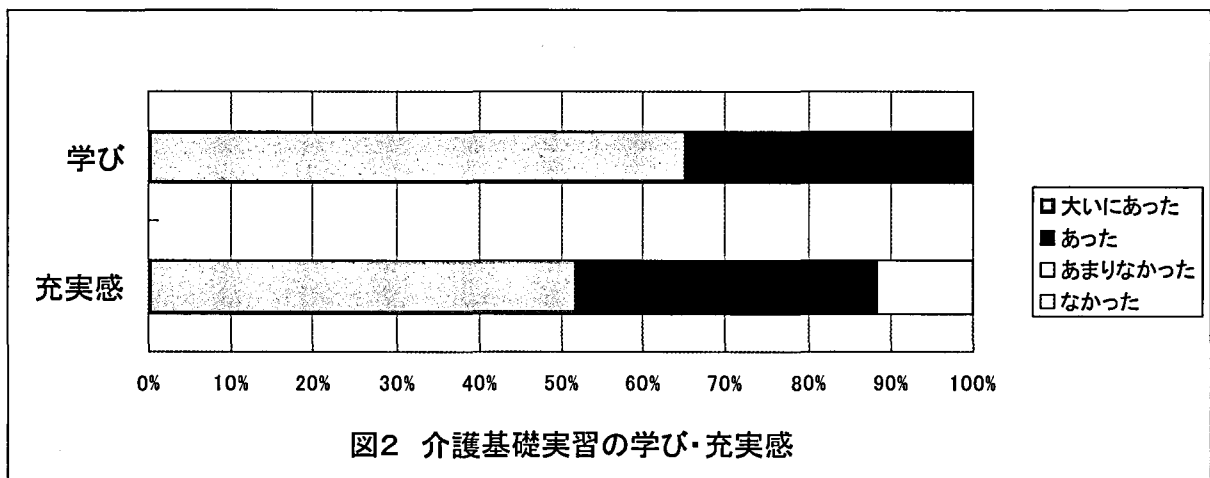
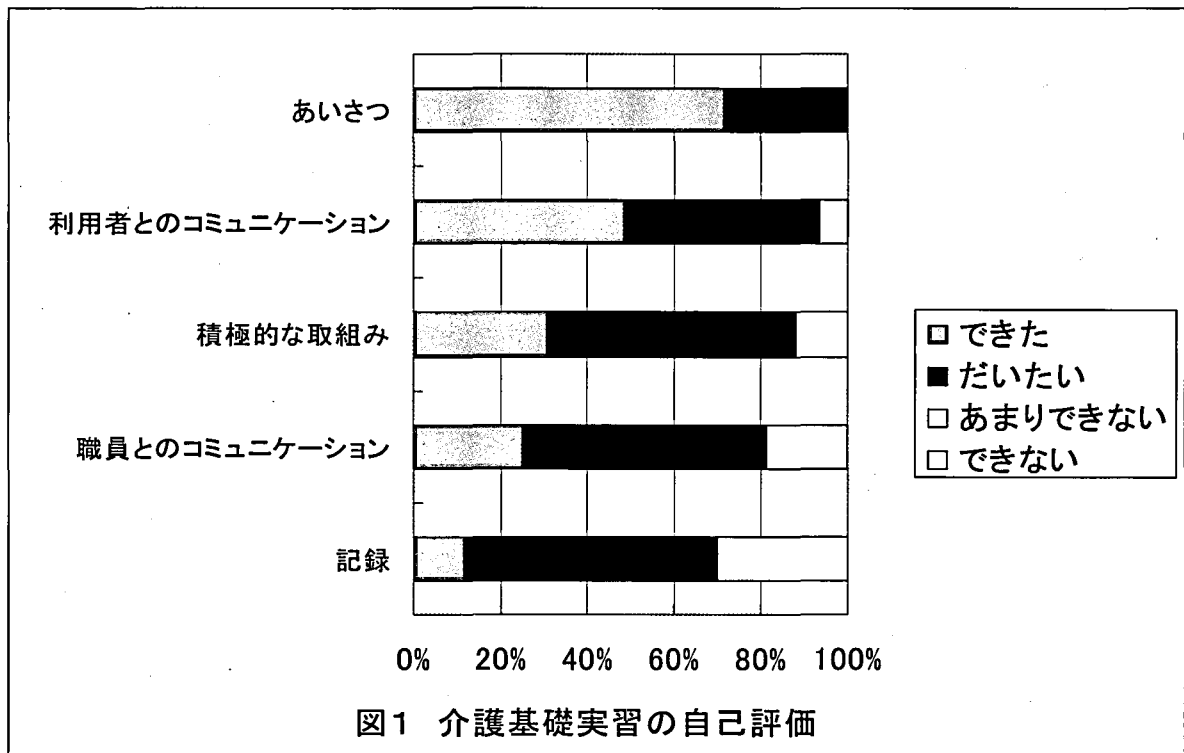
学生に、実習姿勢の自己評価を行ったところ、できた・だいたいできたが高い順に「あいさつ60名(100%)」「利用者とのコミュニケーション56名(93.3%)」「積極的な取り組み52名(86.7%)」「職員とのコミュニケーション49名(81.7%)」「記録42名(70%)」となった。多くの学生ができた・だいたいできたと回答があった。

「記録」に関しては、できない学生は0名であったが、18名(30%)の学生があまりできないとし、できたと回答した学生7名(11.7%)を上回った。これらの評価の中で、一番低い結果となった(図1)。

また、実習での「学び」「充実感」については、<大いにあった>が「学び」39名(65.0%)、「充実感」31名(31.7%)であった。<あった>については、「学び」21名(35.0%)、「充実感」22名(36.7%)であった。<あまりなかった>については、「学び」が0名に対し、「充実感」7名(11.7%)であった(図2)。

表2) 対象者の基本属性

		人数	%
性別	男性	13	21.7
	女性	47	78.3
年齢	18～19歳	41	68.3
	20～29歳	5	8.3
	30～39歳	8	13.3
	40歳以上	6	10.0



自己評価の内容の自由記述をカテゴリー化してまとめた。「取り組み」については、＜積極的に行動した＞＜コミュニケーションができた＞＜技術への取り組みができた＞が挙げられた。実習目的の柱であるコミュニケーションと生活支援技術の習得を把握して取り組むことができています。また、自分から積極的に質問や行動を起こすなど主体的に実習に取り組むことを行っていた。しかし、反面＜緊張や戸惑いが行動に影響＞＜積極的に行動できなかった＞＜指導体制が原因で積極的になれなかった＞というカテゴリーもあった。学生にとって、初めての施設実習体験であるので、緊張や戸惑いは誰しもあり、学生自身の消極性や実習指導体制がうまくとれないことによって、気持ちが前向きになれなかった結果といえる。

「あいさつ」については、利用者・職員・事務職員・

面会者等<誰にでも行った><いつでも行った><相手に配慮した仕方で行った>というカテゴリーが抽出された。学内での介護総合演習の授業の中であいさつについては強調したため、学生なりに実施できたと考えられる。そして、<あいさつによって関係が深まった>という経験をしていた。

「利用者とのコミュニケーション」については、<コミュニケーションの基本姿勢を心がけた>では、相手に対して自分から視線を合わせ笑顔で話しかけ、時間がある限りコミュニケーションを行っていた。新カリキュラムになって、コミュニケーションに関する科目ができたことで心がけられてきたと思われる。また、<個別性に配慮した声かけを行った>では、利用者のコミュニケーション能力や特性に配慮しながら行っていた。一方、<なかなか話せなかった>では、話せる利用者もいれば、なかなか話せない、話が通じていかない利用者もいてできなかったという思いであった。6日間という短い期間の中、施設によっては同じ実習場所でなく、日替わりで実習場所が違う学生もいるので、なかなか話せなかったと切なく思う学生も出てくる。

「職員とのコミュニケーション」では、<自分から質問した>として、わからないことを質問できたとあった。これも、「あいさつ」と同様に学内で実

習態度として指導を行っているので、質問することを考えながら実習していた。また、実習指導者と学生との反省会を行う施設が多くなったこと、職員が明るく、話しやすいことによって質問しやすい状況にあることも影響すると考える。<職員が学生にかけて関わってもらった>では、<自分から質問した>と同じ件数あった。学生を気遣い、質問できる状況をつくり、丁寧に質問に答えてもらったという学生が多かった。一方、<積極的に関われなかった><関わることに戸惑いを感じた>については、緊張や職員の忙しい姿をみると、何をどのように質問すればよいのかわからなかった学生もいた。また、実習指導者とはできたが、他の職員とは話せなかった学生もいた。

「記録」では、<期限に提出するように努力した><量的・質的にも負担><内容の不足>といった内容であり、負担が大きかったようである。昨年より、日々の実習内容を書く行動記録の様式をA3用紙の裏表の量になったために負担に感じた学生が大半だったと考える。

「学び」では、<生活支援技術の習得ができた><コミュニケーションのとり方を学んだ><利用者の理解ができた>等、実習目的に沿った内容であった。また、<新たな知識・技術の習得ができた><

表3. 実習姿勢における自由記述内容

実習態度	カテゴリー (件数)
積極的な取り組み	積極的に行動した(18)
	コミュニケーションができた(11)
	技術への取り組みができた(5)
	緊張や戸惑いが行動に影響(5)
	積極的に行動できなかった(5)
	指導体制が原因で積極的になれなかった(4)
	声かけをしっかりと工夫して行った(4)
	観察ができた(3)
あいさつ	誰にでも行った(34)
	相手に配慮した仕方で行った(12)
	いつでも行う(6)
	声の大きさやし方(4)
	あいさつによって関係が深まる(3)
利用者とのコミュニケーション	コミュニケーションの基本姿勢を心がけた(28)
	会話以外の手段を用いた(10)
	個別性に配慮した声かけ(8)
	なかなか話せなかった(5)
職員とのコミュニケーション	自分から質問を行った(22)
	職員が学生を気にかけてくれた(22)
	関わることへの戸惑いがあった(7)
	積極的に関われなかった(6)

記録	量的、質的にも負担(14)
	内容の不足(9)
	書き方の戸惑い(6)
	書くことができた(5)
	期限内に提出できるよう努力した(5)
	書き方の仕上がりが悪かった(5)
	返ってきた記録から見直しが見直しができた(4)
学び	生活支援技術の習得ができた(11)
	コミュニケーションのとり方を学んだ(8)
	新たな知識・技術の習得ができた(7)
	利用者理解ができた(4)
	その他(10)
感想	関わりから得た励みや喜び等(35)
	学びの充実(12)
	実習における苦痛(12)
	利用者の反応が自分の喜びとなった(10)
	実習での充実(7)
	理想とのギャップ(2)
充実感	実習での切ない思い(4)
	利用者との関わり(12)
	新たな学び、知らないことを教えていただいた(9)
	自分の頑張り(7)
	多くの経験(6)
	職員の配慮(6)
	自分の実習姿勢への反省(4)
	記録の大変さ(3)
体験不足(2)	

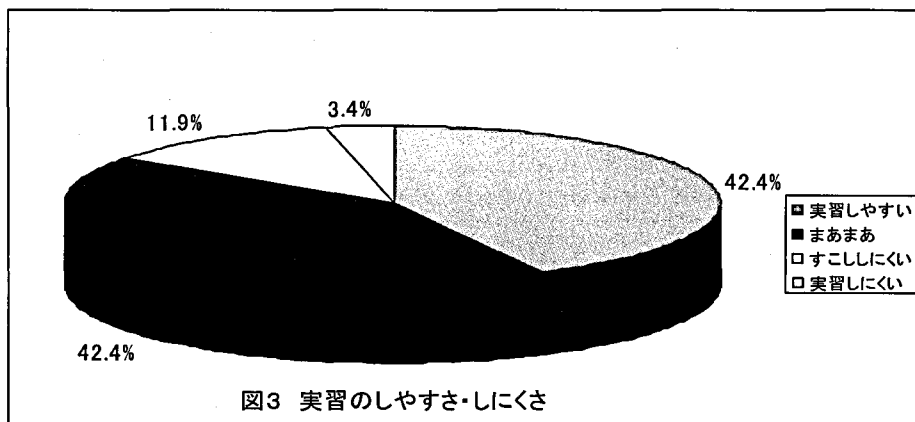
学習内容の統合ができた>等、これからの学内での学習への動機づけができた内容であった。

「充実感」では、<利用者との関わり><自分のがんばり><多くの経験の充実><職員の配慮>等に実習の充実感を感じていた。一方、充実感のなかった内容では、<自分の実習姿勢への反省><経験不足>といった内容であった。これは、「積極的な取り組み」と同様に自分自身の実習姿勢に起因するものと実習指導体制に起因するものがあった。自分自身と実習指導体制の内容があった。

「感想」として、<関わりから励みや喜びを感じた><利用者の反応が自分の喜びとなった>とあるように、利用者・職員と自分との関わりが良い印象となっていた。また、人の喜びを自分の喜びとして捉えることは、普段では意識できないが、実習で感じる内容でもあった(表3)。

2) 実習指導体制

実習指導体制について、学生に実習しやすさ・しにくさという質問で調査した。実習しやすさ・しにくさでは、実習しやすい・まあまあしやすいが60



名中 50 名約 85% を占めていた図 3)。2003 年度の調査では、94 名中 67 名 71.3% であった。2003 年度の調査では、2 年間という実習期間の差があるが、単純に比較すると実習しやすいと感じる学生が多くなった。

その要因として、あてはまるものを複数回答したところ、実習しやすい要因として、約 80% の学生が、日々の担当職員が決まっており、対応が丁寧であったとしている。また、約 60% の学生が、職員が明るく、話しかけやすいとし、約 50% の学生が、一日のスケジュールが決まっています、申し出が考慮され、反省会があるとされている。また、実習しにくい要因として、約 30% の学生が、職員が忙しく話し

かけにくく、職員によって指導内容が違っていたとしている。そして、8 年間で実習しやすくなっていた。

上位より 6 項目は全て実習しやすい要因となった。下位の項目においては、実習しにくさの要因であり、全体的に実習しやすい要因が実習しやすい要因より上回っている。

2003 年度に実施した調査と比較すると、上位 8 項目<質問に丁寧に回答>から<毎日反省会があり>までは両調査結果の高い順に合致し、順位が同じ結果になった。また、実習しにくい要因として、上位 9 番目<職員によって指導内容が違う>以下もほぼ、2003 年度の順番がほぼ同じであった。そし

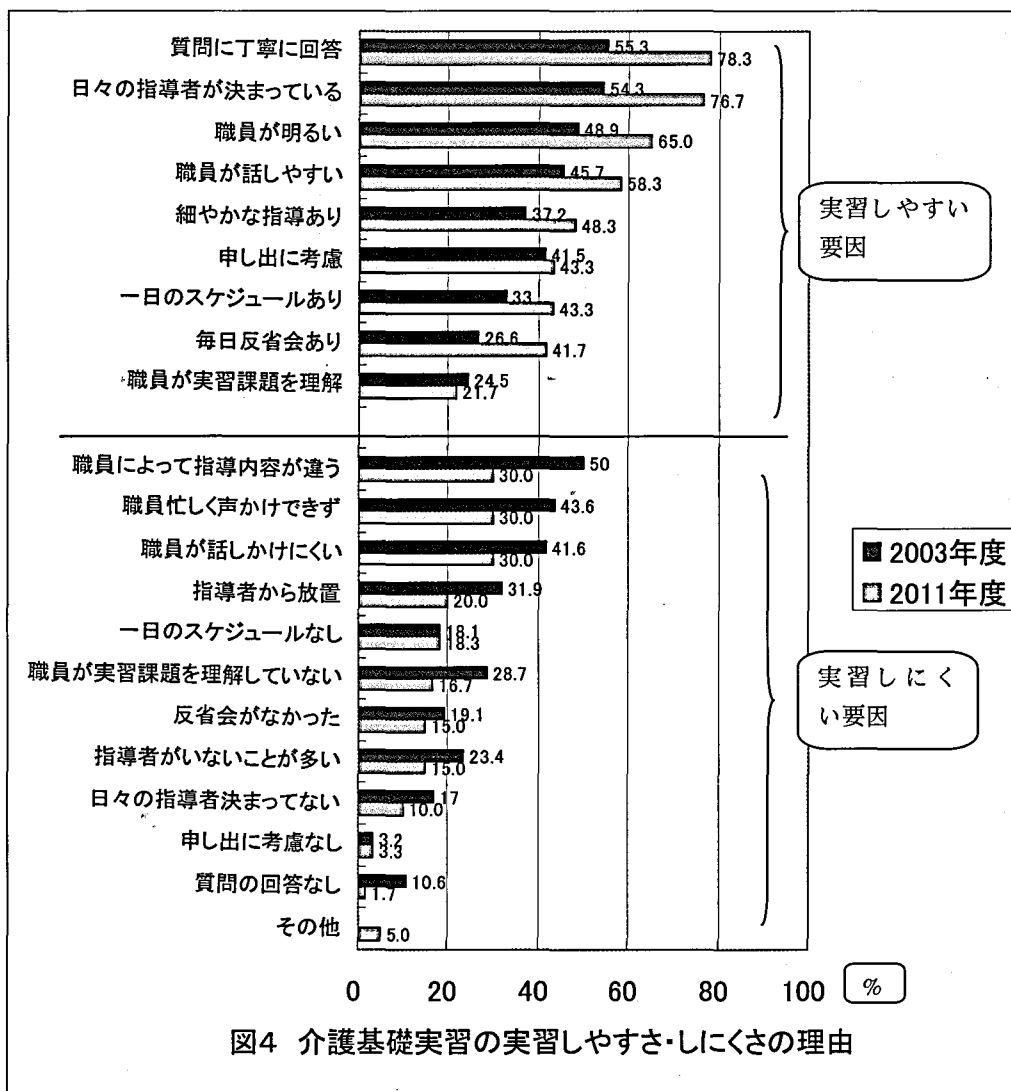


図4 介護基礎実習の実習しやすさ・しにくさの理由

て、先の実習しやすい要因上位 8 項目は、それぞれに約 10% ~ 20% を増加した。特に、客観的に比較しやすい<日々の担当職員が決まっている><一日のスケジュールがあり><毎日反省会がある>について、値が増えていることから、実習施設の実習受け入れに関してよい状態に変化していた。さらに、実習しにくい要因の<職員によって内容が違う><職

員が話しかけにくい><職員が忙しくて声をかけられない><職員が実習課題を理解していない>等の職員との関わりによる内容は、減少した (図 4)。

現在の実習施設の指導体制の改善が明らかになされている状況がうかがえる結果となった。

3) 実習への取り組み姿勢と実習指導体制との関連性
学生の実習への取り組み姿勢と実習指導体制等の

関係性を分析した。

「積極的な取り組み」に関しては、〈学び〉に有意差 ($p < .05$) があつた。積極的な取り組みのある学生は、実習における学びが大きい傾向になる。〈日々の指導者が決まっていない〉〈申出に考慮なし〉〈反省会がなかった〉では、有意差 ($p < .01$) があつた。積極的な取り組みができなかった学生ほど、これらの項目が強く影響を与えていることになっており、うまく職員に関われないために取り組みたいことを実施できずにいた。

「職員とのコミュニケーション」に関しては、〈実習指導体制〉〈日々の指導者が決まっていない〉〈職員が忙しくて声をかけられなかった〉項目に有意差 ($p < .05$) があつた。やはり、職員とのコミュニケーションがとれなかったという学生は、実習指導体制が整っていないことや職員への声掛けもできず、職員とよく関われなかったことを実感していた。

「記録」に関しては、〈職員が忙しくて声をかけられず〉〈指導者から放置〉〈職員が話しかけにくい〉〈申出に考慮なし〉の項目に有意差 ($p < .05$) があつた。記録ができた学生ほど、このように思っていた。熱心な学生ほど、職員の関わりと指導を望んでいるということになる。

「実習指導体制」に関しては、〈職員とのコミュニケーション〉〈充実感〉〈質問に丁寧に回答〉〈職員が話しかけやすい〉に有意差 ($p < .05$) があつた。実習指導体制には職員との関わりが必要で、十分に関わりができた学生では、充実感を得ていた。また、〈日々の指導者なし〉〈職員が忙しく声かけできず〉〈指導者から放置〉〈職員がかかわりにくい〉での有意差 ($p < .01$) からは、実習指導体制には、日々の指導者いて指導を受けられることや職員の雰囲気がよく、質問等の声掛けがしやすいことが関係していた。

「利用者との関わり」「あいさつ」に関しては、有意差がみられなかった。

「学び」に関しては、〈積極的な取り組み〉〈実習指導体制〉〈申出に考慮〉に有意差 ($p < .05$) を認めた。また、「充実感」とは、有意差 ($p < .01$) があつた。学びが多いことは充実感と相互関係にあり、ともに実習指導体制が整えられていることに影響するものであつた。また、学びが多いことは学生の主体的な学習意欲を実習施設側が考慮してくれること、充実感をもつためには日々の指導者がいることと関連していることになった。

6. 考察

本学科の介護学生は、1施設2～3名程度であるが、それぞれの配属先は異なるため、初めての環境

の中はほぼ1人で実習している。学内のように周囲の学生と協力し合つて行う学習と違い、状況を見て、利用者や職員に関わりながら行うという学生自身が主体的にならないとできない学習である。しかし、実習に臨む学生の心理状態は、かなりの不安を抱えていることがわかっている^{2) 5)}。介護基礎実習に臨んだ学生たちの心理状態も同様な状況であつたであろう。こうした中で学生の実習後の振り返りとした質問調査紙の結果から得られたことを考察してみた。

(1) 実習姿勢が及ぼす影響

不安と緊張感で介護実習に臨んでいた学生の実習姿勢の自己評価は高かつた。今回が初めての施設実習であつたが、多くの学生が自分なりに努力をして、あいさつができ、利用者・職員とのコミュニケーションも図れ、積極的に取り組むことができたという実感をもっていた。積極的な取り組みができたからこそ、利用者、職員に受け入れられて、多くの学びを得て充実感があつたという結果であつた。また、学生の積極的な取り組みの姿勢は、職員の指導に対する期待が大きいため指導者が決まっていないことや反省会がもたれないことに対して不満を感じることにつながっていた。さらには自分たちの主体的な行動に対して考慮してもらえないことも不本意ととらえていく傾向にあることがわかつた。

実習に対する姿勢が消極的な学生は、実習のしにくさを強く感じており、実習に臨む姿勢が実習の学びや充実感に影響を与えていた。実習指導者や職員に関われずにいた学生は、緊張感や戸惑いがとれず、消極的な実習になり学びが少かつた。今後実習に対するモチベーションをいかに高め、それを実習期間中に保持できるようなサポートを考えていく必要がある。実習に対するモチベーションを高めるために、不安や緊張を和らげ、各自が目的意識を明確にして実習に臨めるようにしていくことが重要である。そのためには、教員間での介護総合演習の授業内容の共有化や巡回指導の在り方が大切になってくる。学生にとって有意義な充実した実習にいくためには、養成校側の実習指導体制を整えていくことも必要になってくる。

利用者や職員とのコミュニケーションが実習の充実感や学びの大きさに影響することもわかつた。利用者や職員とコミュニケーションがとれないことは、実習への行き詰まりを感じてしまうことにつながる。2割弱の学生が、職員とのコミュニケーションが「あまりできなかった」と答えていることから今後の課題になってくる。また、職員とのコミュニケーションについては、実習指導体制・指導者の不在・職員の忙しさ等が影響しており、施設全体の実

表2) 各項目の分析

	積極的な取り組み	あいさつ	利用者とのコミュニケーション	職員とのコミュニケーション	記録	実習指導体制	学び	充実感
積極的な取り組み	/						*	
あいさつ		/						
利用者とのコミュニケーション			/					
職員とのコミュニケーション				/		*		
記録					/			
学び	*						/	**
充実感						*	**	/
実習指導体制				*		/	*	*
日々の指導者があり								
日々の指導者なし						**		
日々の指導者決まってない	**			*				*
質問に丁寧に回答						*		
職員忙しく声かけできず				*	*	**		
質問の回答なし								
指導者から放置					*	**		
細やかな指導あり						**		
一日の計画あり								
職員に実習内容が不徹底								
職員に実習内容が徹底								
職員が明るい								
職員が話しかけやすい						*		
職員が話しかけにくい					*	**		
職員によって指導内容が違う								
申し出に考慮							*	
申し出に考慮なし	**				*			
毎日反省会あり								
反省会がなかった	**							
スケジュールあり								
その他								

*p<.05 ** p < .01

習への取り組みが関係している。このことは実習調整の段階で実習に対する理解を深めていく必要がある。最近の学生の中で対人関係を築くことが難しい学生もいることから、コミュニケーションに対するサポートは必要になる。しかし、職員が学生に対して気にかけてくれ、職員の配慮が見られ、実習の充

実感につながっていることがわかったので、実習施設の指導者とともにこのことを共有していきたい。

(2) 実習のしやすさとしにくさの状況の比較の考察
 実習指導体制としての実習のしやすさ・しにくさの今回の調査は、基礎実習終了時ということであっ

たが、2003年時の調査⁴⁾と比較してみると、ほとんどの項目で合致した傾向を示した。実習のしやすい要因としてあげられている項目は、〈質問に丁寧に答えてくれる〉〈日々の指導者が決まっている〉〈職員が明るい〉〈職員が話やすい〉〈細やかな指導がある〉〈一日のスケジュールがある〉〈学生の申し出を考慮してくれる〉〈毎日反省会がある〉のすべてにおいて、2003年度より高い割合を示した。また、実習のしにくさの要因として、〈職員によって指導内容が違う〉〈職員が話しかけにくい〉〈職員が忙しく声がかけにくい〉〈職員が実習課題を理解していない〉〈指導者から放置されてしまう〉〈反省会がなかった〉〈指導者がいないことが多い〉〈日々の指導者決まっていない〉〈質問の回答がない〉の項目については、すべてにおいて改善が見られていた。その中でも職員による指導内容の違いはもっとも改善がされている。施設の職員の雰囲気についても改善が見られ、話しかけやすくなっている。職員が実習課題を理解しているか否かについては、今回の結果からは差が少ないため学生にとっては、はっきりとした実習のしやすさ・しにくさの要因にはなっていないと判断できる。

これらの結果から考えられることは、一つに新カリキュラムにおいて実習教育の強化が影響していると考えられる。実習指導者講習会の受講の義務化や実習指導マニュアルの整備がなされてきたことが施設職員全体の雰囲気を変え、実習受け入れ体制が整えられてきたからと考えられる。また、養成校と実習指導者間の連携の強化がある。本学科では、1年間に2回実習指導者連絡会議を開催している。1回目は、年度当初に開催し、実習計画に加え、実習内容や短大での指導内容を伝えている。また、年度の終わりには、学生の実習の振り返りをデータで示し、実習への理解を深め、実習指導者と教員との意見交換が行われてきているので、こうした積み上げの効果もあると考える。実習指導者として、養成校卒業生が多くなってきており、実習に対しての理解が深まり、少しずつ職員にも実習生の存在を認め、丁寧に対応する指導が浸透しつつある。実習指導体制が整えられ、学びの大きい充実した実習ができるように、実習課題を理解してもらい、学生たちのやる気がそがれないように、今後実習施設とは更なる連携を図っていくことが重要になる。

(3) 実習指導体制の充実と自己効力感の育成

実習しやすい実習指導体制のもと、職員や利用者とのコミュニケーションを通し、職員に気にかけてもらい利用者に名前を覚えられたり感謝されたりすることで喜びや楽しさという感情とともに自分の存

在を感じるができる。さらに、関わりが、利用者の喜びや切なさを引き出し、利用者への思いやりの気持ちに変わっていく。これは、援助者と利用者自身が、利用者主体で生活の快を求めるという介護の根底をなす感情を育成する経験であると考えられる。知らなかった場所が親しみのある場所となり、自己効力感が強くなっていく。自己効力感、学力と関係なく介護実習への学生自身が感じる課題の重さに関係し、やり遂げた後は自信となって学年があがる毎に上昇傾向にあるという⁵⁾。また、自己変化をきたすのに影響を与えたのが「利用者」「職員」「実習担当者」であり、「行動」「態度」教育であるとし、早期初期教育が必要であるという⁶⁾。2年間の実習の積み重ねが、学生の人間的な成長、専門知識・技術の向上をもたらすために初期からより良い実習指導体制のもとで行うことが重要になってくる。

介護実習への過度の不安や緊張から、学習意欲だけでなく自己に対する自信も低下させてしまう学生がいる¹⁾。また、福祉系の学生は、「忙しそう」等の理由により、遠慮がちになってしまい、それが消極的であると職員に思われ関係が深められるという²⁾。さらに、教員は、学生の気質や実習へのモチベーション等、学生自身に対応すると共に施設側への実習調整も図っていく必要がある。

7. 結論

初期の介護実習に焦点をあてて、学生の実習姿勢の自己評価と実習指導体制の関連性について調査分析した結果、以下のことが明らかになった。

- 1) 実習への取り組み、あいさつ、利用者とのコミュニケーション、職員とのコミュニケーション等実習への姿勢としての自己評価は高く、積極的に実習に臨んでいた。
- 2) 積極的な実習姿勢ができたからこそ、利用者、職員に受け入れられて、多くの学びを得て充実感があった。また、指導者が決まっていないこと、反省会がもたれないこと、自分たちの主体的な行動に対して考慮してもらえないことなど不満や本意ととらえていく傾向にあることがわかった。
- 3) 実習に対する姿勢が消極的な学生は、実習のしにくさを強く感じており、実習に臨む姿勢が実習の学びや充実感に影響を与えていた。実習に対するモチベーションを高めるために、不安や緊張を和らげ、各自が目的意識を明確にして実習に臨めるようにしていくことの重要性が示唆された。
- 4) 利用者や職員とのコミュニケーションが実習の充実感や学びの大きさに影響することもわ

かった。実習指導体制・指導者の不在・職員の忙しさ等が影響していた。また、職員が学生に対して気にかけてくれ、職員の配慮が見られ、実習の充実感につながっていた。

- 5) 多くの学生が、実習しやすいと感じ、2003年度の調査と比較し、実習指導体制が整ってきていた。その要因として、新カリキュラムの実習教育の強化、実習指導者と本学科との連携等が考えられた。

実習指導体制の強化は、学生に職員との関わりを深め積極的に取り組み学びや充実感をもたらしていた。従って、学生にとって人との関わりを深めることで人間的な成長を促し、専門知識・技術の習得するためには、より実習しやすい実習指導体制が必要である。

おわりに

学生の質や年齢層の変化等、介護実習教育における学生側の課題もある現在、8年前の実習指導体制と比較して実習施設職員と教員との連携等の成果が現れていることを検証できた。これからも、学生が、生き生きと積極的に学び、充実した実習ができ、これからの介護を担っていけるように、実習施設とは更なる連携を図っていきたい。

【引用文献】

- 1) 横山さつき「介護実習における学生の俯瞰に関する因子分析研究」中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要 9. 125-133. 2008-03
- 2) 占部尊士『介護福祉実習における学生の意識変化に関する研究—第I段階の介護福祉前後での検討—』介護福祉学、16(2) 216 - 228 2009
- 3) 丸山順子、渡辺千枝子『介護学生の自覚的健康感と自己健康管理—介護実習前と介護実習中の比較—』介護福祉教育 No16 36 - 40 2002
- 4) 尾台安子、山下恵子『介護福祉実習における学生の意識と課題』松本短期大学研究紀要第13号 1-9 2003-03
- 5) 小松一子、川野素子『福祉介護コースの学生のアイデンティティと自己効用感；職業選択と実習による社会経験との関係』花園大学社会福祉学部研究紀要 16. 1-9. 2008-03
- 6) 赤沢昌子『初期介護実習後の自己覚知と自己理解』松本短期大学研究紀要 16 101-109 2007-03

【注】

i 2009年からのカリキュラム改正にともない、介護福祉士養成施設から「介護実習Ⅱ」の実習生を受け入れる介護施設は、実習指導講習会の修了者を

配置することが必須となった。対象は、介護福祉士資格を取得してから3年以上の実務経験を有し実習指導者となる者で、各県の社会福祉協議会や介護福祉士会などが実施する講習では、実習指導や学生理解についての講習や演習が行われる。現在は経過措置が取られているが、平成24年の4月からは義務付けとなる。加えて、「介護実習Ⅱ」の受入施設については、実習の指導マニュアルが整備されていることや実習指導者を中核にした指導体制が確保されるように常勤の介護職員の人数に対する介護福祉士の割合が3割以上であることなどの条件も課せられている。